

II-4 前頭側頭型痴呆 (ピックタイプ) における デイケア活動の試み

—問題行動への対応を中心に—

○西川 志保¹⁾ 池田 学²⁾ 松井 博¹⁾ 繁信 和恵²⁾
小森憲治郎²⁾ 田辺 敬貴²⁾

【はじめに】

当院では、1998年5月より正式に認可を受け重度痴呆患者デイケアを開始した。開始後五ヶ月たち現在登録者は16名であるが、そのうち前頭側頭型痴呆患者は6名で全体の約4割を占める。前頭側頭型痴呆患者の場合、脱抑制的な精神症状が主症状となり、問題行動が多く対応に苦慮する事が多いとされている。当デイケアでも、参加当初は常同行動や脱抑制的な行動が見られた。しかし、そういった問題行動は次第に消失し、デイケア内での新たな行動パターンを獲得し、落ち着いていく症例が多く見られた。

今回、初期のピックタイプの女性症例を通してデイケアの効果により消失・軽減した問題行動、新たに生じた行動パターン、スタッフの対応、について若干の考察を加え報告する。

【症例】

66歳、右利き、女性

教育年数：12年

職歴：専業主婦

生活歴：現在は、定年退職をした夫と2人暮らし。近所に娘夫婦が住んでおり、半年前までは娘夫婦に代わり昼間だけ孫の世話をしていた。

現病歴：4年前(62歳時)頃より、多趣味であったのが家に閉じこもるようになり、テレビを見る時間が長くなった。2年前(64歳時)より、卵焼き・惣菜のコロッケ・御飯・漬け物といった同じ料理を繰り返し作るようになり、同じ話を何

度も繰り返すようになった。1年前頃(65歳時)より、休日にも孫の幼稚園バスの迎えに行ったり、時間を待たずに数時間前から何度も繰り返しバス停に出かけるようになった。

当院初診時：家事を全く行わなくなり、孫の通園迎えも制止のきかないものとなっていた。診察場面では、多幸的な態度が目立った。

【MRI画像】

右側頭葉から前頭葉優位の限局性脳萎縮が認められた。

【SPECT画像】

両側前頭葉から側頭葉に血流の低下が認められ、特に右側に著明であった。

【神経心理学的検査】

簡単な知的機能検査ではほぼ問題はなかったが(MMSE27/30)、複雑な検査では軽度の障害が認められた(WAIS-R: F1Q-90, VIQ-95, PIQ-85)。全体的には極軽度の知的機能障害が考えられた。

〈前頭葉機能検査〉

検査結果より、保続が強く、概念の切り替えが困難であると考えられた。(表1)

Word Fluency	「動物」6, 「果物」7, 「乗り物」5, 「か」3, 「た」1, 「さ」4 (保続+)
WCST 1回目	達成カテゴリ-0, 保続15, セットの維持困難6
2回目	達成カテゴリ-1, 保続11, セットの維持困難4
Stroop Test	read aloud 正答49/50 colour naming 正答45/50
trail making	A: 1分4.4秒 B: 遂行不可能

表1 神経心理学的検査<前頭葉機能検査>

WCST:Wisconsin Card Sorting Test

1) 財団新居浜病院

2) 愛媛大学神経精神科

